

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成28年9月 1日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 博士課程5年

氏 名 桐 越 仁 美

助 成 の 種 類	平成28年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第15回国際民族生物学会学術大会 15th Congress of the International Society of Ethnobiology		
発 表 題 目	Free access to kola nut collection and income opportunities for immigrant women in the cocoa forest zone of southern Ghana		
開 催 場 所	Makerere University, Kampala, Uganda		
渡 航 期 間	平成 28 年 8 月 1 日 ～ 平成 28 年 8 月 10 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して 下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	400,000 円	
	使用した助成金額	400,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空賃・交通費	210,000円
		発表資料準備費用	20,000円
		大会参加登録料	25,000円
査証手数料		13,000円	
宿泊料・滞在経費		132,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は国際研究集会発表助成によってご支援いただき、ありがとうございました。大学院生の身分では航空運賃もさることながら、大会参加費の捻出さえも容易ではありませんが、ご支援いただいたおかげで無事に学術大会に参加し発表することができました。また、ほかの助成金に比べて手続きが簡便であるうえに、早急に対応いただけたことで、余裕をもって大会の準備を進めることができました。大学院生にとって国際学会に参加する機会を得られることは大変重要であり、このような助成を受けられる環境があることはとても幸運なことだと感じています。今後もこの助成事業が継続されていくことを心から願っております。		

成果の概要

桐越仁美

研究集会名

15th Congress of the International Society of Ethnobiology
(第15回国際民族生物学会学術大会)

開催地・開催期間

ウガンダ共和国 カンパラ マケレレ大学
平成28年8月1日～平成28年8月7日

報告者の発表題目

Free access to kola nut collection and income opportunities for immigrant women
in the cocoa forest zone of southern Ghana

研究集会について

国際民族生物学会 (The International Society of Ethnobiology) は1988年に発足され、人類と自然の関係を研究する研究者や実務者たちの交流および協力を主たる目的としている。この研究集会の特徴として、生態学や農学、文化人類学、開発学などの分野の研究者だけではなく、多くの環境保全や文化遺産の保護などに携わる実務者が広く加入している点があげられる。

学術大会は2年おきに世界各国で開催されており、学術大会では、研究機関や教育機関、民間企業、NGO団体などに所属する各分野の専門家によって、森林保全や植物利用、伝統知識の保護などに関する発表がおこなわれている。国際民族生物学会は人文社会科学分野と自然科学分野をまたぐ学際的な学会となっている。

今回の第15回大会のテーマは、「人類発展のための民族生物知 (Ethnobiological Knowledge for human wellbeing and development)」であり、Ethnobiology and Economic Development や Ethnobiological Knowledge & Natural Resources Management、Ethnobiological Knowledge Transmission and Survival of Indigenous Languages、Culture at Cross Roads、Traditional Medicine and Modern Medicine といったサブテーマが設けられた。どのサブテーマにおいても在来知 (Local Knowledge) が議論の中心にすえられ、分野や研究対象地域を横断した活発な議論が交わされた。アフリカにおける開催ではあったが、アフリカ研究者に限らずアジア研究者や南アメリカ研究者などが参加しており、世界各地を対象とした多様な研究についての報告が聞けたことが印象的であった。

報告者自身の研究報告

国際民族自然誌学会におけるガーナ南部のカカオ生産地域における女性のコーラナッツ採取と現金稼得機会に関する発表をおこない、各国の研究者と議論することを第一の目的とした。報告者は Ethnobiological Knowledge & Natural Resources Management をサブテーマとしたセッションにおいて発表した。

報告者は、西アフリカにおいて流通するコーラナッツと移民との関係性に着目し、とくに移民女性の現金収入とコーラナッツの関わりについての調査内容と分析結果について発表した。西アフリカの交易史のなかで地位を確立したコーラナッツは、現在でもガーナの森林地帯から西アフリカ内陸部のサバンナ地帯に輸出されている。コーラナッツはガーナ南部の森林地帯においてカカオとともに生産されており、サバンナ地帯の商人によりサバンナ地帯に輸送される。ガーナにおいては、コーラナッツの樹木はカカオの庇陰樹として利用されており、コーラナッツはその副産物として収穫される。ガーナのカカオ生産は、アブサと呼ばれる小作人制度のもとで生産されている。この制度では、小作人はまとまった土地代を必要とせず、カカオの収穫物を半分または3分の2、地主に納めることで農地の利用が可能となる。コーラナッツは、カカオと同様にアブサの制度にもとづいて地主と小作人のあいだで分配される。地主と小作人以外の人が地面に落ちたカカオを採取することは許されていないが、コーラナッツについては、地面に落ちたものであれば誰でも採取することが可能である。みずからの農地をもたない移民女性は、他者の農地において地面に落ちたコーラナッツを収集し、販売することで現金を得ている。コーラナッツの売却金は日々の出費や食費、子どもの養育費にあてられる。夫との死別や離婚などを理由に、ガーナ南部の森林地帯に移住した女性は、現金収入をコーラナッツの収集に依存している。

報告者が発表したセッションの全体では、世界やアフリカで人口増加が急速に進み、人の移動が活発になっている現在の状況のなかで、いかに自然資源を守り共有していくのかといった点や、各発表者の専門分野や研究対象地域における自然資源利用の今後の動向についての議論が交わされた。

国際民族自然誌学会に参加し発表することで、コーラナッツに関する地域住民の在来知について多様な分野の研究者や専門家との議論を交わすことができ、ガーナにおける移民女性の現金稼得の機会についての新たな知見を得ることができた。また、ウガンダにおける女性の生計活動についての話を聞くことができ、ウガンダ人女性研究者と議論を交わすことで、ガーナ北部からの移民女性やウガンダ女性はともに社会的に現金へのアクセスが難しい状況にあることが明らかとなった。一方で、ガーナ北部の女性は、18～19世紀に発展したコーラナッツ交易が形成した商業ネットワークを利用することで、新天地さらには現金稼得の機会を得ることが可能となっており、こういった交易上のつながりが西アフリカの特徴であるということが明らかとなった。他地域や他分野の研究者とのあいだの議論や交流により、自身の研究で今後着目すべき点や課題などがより明確になったと感じている。

謝辞

最後になりましたが、国際民族生物学会学術大会における発表の機会を与えてくださった、公益財団法人 京都大学教育研究振興財団に、心より感謝を申し上げます。